

## 2009 年度インド思想史学会 第 16 回学術大会のご案内

インド思想史学会第 16 回学術大会を、以下の通り開催いたします。  
皆様、どうか万障お繰り合わせの上ご参加ください。

### 記

日時 2009 年 12 月 26 日 (土)  
場所 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館 2 階 210 号室

(理事会 12 時から 13 時 00 分まで 京大会館 2 階 213 号室)

参加受付 12 時 45 分から 京大会館 2 階 210 号室前

### 研究発表者および発表題目

13:00 ~ 13:50: 小倉 智史「Rajatarāṅgīnī からムガル朝期のペルシア語年代記  
への歴史情報の伝承をめぐって」

13:55 ~ 14:45: 大島 智靖「ソーマ祭の潔斎」

### 休憩

15:00 ~ 15:50: 李 宰炯 (イ ジェヒョン) 「バルトリハリの言語哲学にお  
ける<時間>論の位置づけ」

15:55 ~ 16:45: 藤井 隆道「ヴリッティカーラの思想的立場—  
『ミーマーンサー哲学』成立過程についての一視点」

16:50 ~ 17:40: 赤松 明彦「パースペクティヴィズムにおける空華」

総会 17:40 - 18:00 (発表終了後、引き続き 211 号室で)

懇親会 総会終了後 211 号室にて。 会費：3000 円 (当日受付)

インド思想史学会・事務局  
京都大学文学部・赤松研究室内  
電話 075-753-2822 (赤松研究室)

※なお、従来同封しておりました出欠回答用のハガキは、経費節減のため前回からとりやめています。  
ご理解のほどお願いいたします。メールなどで出席のご連絡を頂けると幸いです。お返事がなくても  
懇親会の準備は怠ることなく皆様のご参加をお待ちしております。

Rājatarāṅgiṅī からムガル朝期のペルシア語年代記への歴史情報の伝承をめぐって  
小倉 智史 (京都大学文学研究科西南アジア史学専修)

ムガル朝第三代皇帝 Jalāl al-Dīn Akbar (r. 1556-1605) の命令によって、別宮ファテプル・スィークリーの一角に設けられた宮廷翻訳局 (Maktab ḥāna) では、数多くのサンスクリット語文献がペルシア語に翻訳された。代表的な翻訳文献として Atharvaveda や Mahābhārata を挙げることができるが、他に Kalhaṇa 作 “Rājatarāṅgiṅī” やムスリム王朝時代を生きた三人のバラモン、Jonarāja、Śrīvara、Śuka によって作成されたその続編も “Tārīḥ-i Kaśmīr” という名でペルシア語に翻訳されている。

ムガル朝の宮廷で作成された歴史書である Nizām al-Dīn Aḥmad “Ṭabaqāt-i Akbarī (1594 作成)” や Abū al-Faḍl “Ā’in-i Akbarī (1597-98 頃作成)”、ビージャプールのアーディル・シャーヒー朝の宮廷で作成された歴史書である Firištah “Gulšan-i Ibrāhīmī (1609-10 作成)” にはカシミール史の章が別個に設けられている。また 17 世紀前半には、Anonymous “Bahāristān-i Šāhī (1614 頃作成)” や Ḥaydar Malik Čadūrah “Tārīḥ-i Kaśmīr (1621 頃作成)” といったカシミールの年代記が相次いで作成された。これら一連の歴史書に記されている情報は、上述の Rājatarāṅgiṅī ペルシア語訳に多くの部分で拠ったとされる。このことは従来の研究で度々指摘されてきたが、近年 Slaje が改めて Rājatarāṅgiṅī からムガル朝期のペルシア語年代記への歴史情報の伝承経路を提示した (Slaje, Walter 2005, “Kaschmir im Mittelalter und die Quellen der Geschichtswissenschaft”, *Indo-Iranian Journal* 48,2005,1-70.pp. 47-51.)。

しかしながら、ムガル朝期ペルシア語年代記の中で Rājatarāṅgiṅī ペルシア語訳に拠ったとされる部分にも、オリジナルの Rājatarāṅgiṅī には見られない歴史情報が追加されている箇所が多々存在する。今回の発表では、宮廷翻訳局での翻訳活動や Rājatarāṅgiṅī ペルシア語訳のテキストの特徴、ムガル朝期のペルシア語年代記について概観した後、Rājatarāṅgiṅī の Hoshiarpur 版とムガル朝期のペルシア語年代記の間でテキストが異なる箇所をいくつか取り上げる。そして歴史情報が伝承されてゆく中で、他にどのような文献が参照されて、情報が追加されていったのかを検討する。

# ソーマ祭の潔斎

大島 智靖

ソーマ祭の祭主は、開始時に *dikṣā* (潔斎) と呼ばれる諸儀礼を行う。これは、潔斎に特有の祭式行為や *īṣṭi* (穀物祭) 及び各種献供をも含む一連の複合祭式である。その儀礼工程は従来、特に *Śrauta-Sūtra* 研究を通じて明らかにされているが、各学派の *brāhmaṇa* 部分/*Brāhmaṇa* 文献 (合わせて *br.* とする) において多様に展開する祭式解釈学については依然部分的な考察に留まっており、解明の余地が多く残されている。また大局的には、潔斎諸儀礼がソーマ祭に必須の通過儀礼として固定されるに至った歴史的過程も、やがては検討されるべき問題として控えている。本発表では、未だその全貌が明らかでない *Maitrāyaṇī Saṃhitā* や *Kāṭhaka-Saṃhitā* の *brāhmaṇa* 部分を含め、黒 *Yajurveda* 及び白 *Yajurveda* の *br.* の記述から、総合的に「*br.* の潔斎諸儀礼」を再構築する。さらに、儀礼過程やその解釈を巡る学派間の相違に注意しながら、潔斎思想の一端を論ずるつもりである。潔斎に関する最も詳細にしてまとまった記述は、ソーマ祭の最小単位とされる *Agniṣṭoma* の冒頭に配置されているが、*Yajurveda* 文献群のそれに比して少ないながらも、*Ṛgveda*, *Sāmaveda* 各派の *br.* にも潔斎に関する言及が見出される。さらに、ソーマ祭と結び付いている王権諸儀礼の記述においても同様である。

潔斎に入った祭主 (*dikṣitá*) は、剃毛や沐浴を始めとする浄化儀礼を経て、象徴的に俗世を離れ神々の世界へ赴きつつ (地上から天界への「中間存在」となり)、自身が「供物」となるよう準備をする。一方で「胎児」の擬態を取り、発生学的考察を加えながら胎児に準じた装飾を施され、又胎児のように振舞うことを要求される。さらに諸儀礼を経て *dikṣitá* となったことを公言し、神々の「一員/好ましき者」となるに至る。このような祭主の諸相に関する議論が *br.* における [潔斎] 解釈学の主要テーマである。つまり祭主はある種の「儀礼的再生」を通じて祭式に臨むことになる。しかし一連の解釈が展開していく中で、「中間存在」「供物」「胎児」という諸要素はいかなる関連を持ち、どのような秩序のもとで構築されているのだろうか。テキストが全てを伝えているわけではなく曖昧な部分も残されるが、*br.* の分析を通じて各学派の統一的解釈を考慮しつつ、「潔斎に入った状態とはいかなる状態なのか」について新たな視点を模索したい。

またこの問題に関連して、黒 *Yajurveda* から白 *Yajurveda* への思想的变化にも注目する。*Vājasaneyin* 派の伝える *Śatapatha-Brāhmaṇa* では、特に「供物」に対する解釈、及び「胎児」である祭主の「誕生」に対する解釈において、独自の発展が確認できる。

*br.* において、潔斎に入った祭主は「自身 (*ātman*) を犠牲にして捧げる」と言われるが、ソーマを搾る本祭の前日即ち準備祭 4 日目の午後に執行される犠牲獣祭 (*Agnīṣomīyapaśu*) によって「自身 (*ātman*) を買い戻す」とされる。潔斎における「供物」化がこの思想に繋がるものと考えられ、ソーマ祭全体に関わる重要な役割を果たしていることが窺える。

## バルトリハリの言語哲学における 時間 論の位置づけ

広島大学 李 宰炯<sup>イ ジェヒョウ</sup>

バルトリハリは主著 *Vākyapadīya* (以下 VP) 第三卷第九章すなわち『<時間> 詳解』章を次のような詩節で始める。

VP3.9.1: vyāpāravatyatirekeṇa kālam eke pracakṣate / nityam ekaṃ vibhu  
dravyaṃ parimāṇaṃ kriyāvatām // (「ある者達は次のように主張する (pracakṣate)。  
活動 (vyāpāra) とは別個に 時間 というものが存在する。その 時間 は、  
常住 (nitya)、遍在 (vibhu)、単一 (eka) の<実体> (dravya) であり、行為 を  
有するもの (kriyāvat) の尺度 (parimāṇa) である」)

彼がこの詩節を『時間 詳解』章の最初に位置させていること、そしてこの詩節において「ある者達」(eke) という表現を使用していることは彼の 時間 論、さらには彼の言語哲学全体を理解する上で非常に重要な意味を持つ。

VP は語ブラフマン一元論の立場から我々の日常的言語活動の成立を解明しようとする作品である。それゆえ、VP 第一卷 (Brahmakāṇḍa) においてバルトリハリは唯一の究極の実在である語ブラフマンについて論じる。そして第二卷 (Vākyakāṇḍa) においては、コミュニケーションの手段として唯一その実在性が認められる単一不可分な文について論じる。さらに第三卷 (Padakāṇḍa) では、彼は単一不可分な文意から概念知によって抽出 (appodhāra) された、文意を構成すると見なされる様々な語意について詳論する。

注目すべきことは、バルトリハリが『方位 詳解』(Diksamuddeśa) 章の最初の詩節 (VP3.6.1) において 方位・能成者 (sādhana)・行為 (kriyā)・時間 の四つを挙げ、能力 (śakti) として規定している点である。彼はこの四つの 能力 によって現象世界—彼にとっては意味の世界—の枠組みを説明しようとしている。例えば「デーヴァダッタがパタリプトラに行く」という事象すなわち文意の成立を説明するために、彼はパタリプトラに到着という結果をもたらす 能力 としての「行く」という 行為 を想定した上で、その 行為 の実現手段として 能成者 という 能力 を想定し、そして動態的な事象である 行為 の成立のために 時間能力 を、デーヴァダッタやパタリプトラといった静態的な事象つまり物体の成立のために 空間能力 を要請しているのである。

VP3.9.1 において「ある者達」は 時間 を単一・常住で遍在する、行為 とは別個に存在する 実体 であり、行為 を有するものの尺度であるものと見なす。「ある者達」が 時間 と見なすものは VP3.6.1 において言及されている、意味の世界の一部分であり、その世界を成立せしめるものである四つの 能力 の一つとしての 時間 に他ならない。文意を成立せしめる 能力 の一つとしての 時間 は日常的言語活動においては 実体 と理解されるのである。

バルトリハリはこの「ある者達」という言葉を使用することによって、彼が VP において「時間」という語によって理解される、言語表現上の 時間 について論じると同時

に、それとは異なる観点すなわち形而上学的な観点からも 時間 について論じていることを暗示している。「ある者達」(eke) という表現はここでは別観点或は別見解の提示を想定して使用されていると理解されるべきである。バルトリハリが形而上学的観点から 時間 について論じる箇所は、VP1.3 とそれに対する Vṛtti である。その箇所において、彼は 時間 を語ブラフマンが有する 自立性能力 (svātantryaśakti) と見なしている。「ある者達」という表現を含む VP3.9.1 が『時間 詳解』章の最初に位置づけられているのは、従って当該の詩節から始まる『時間 詳解』章においては、バルトリハリ自身が前の VP1.3 とそれに対する Vṛtti とは違って、形而上学的な観点からではなく、日常的言語活動の観点から 時間 を論じようとしているということを含意していると理解すべきであろう。

時間 のみならず、いかなる語意に関しても、彼はその語意を主題とするそれぞれの『詳解』章において必ず言語活動のレベルと形而上学のレベルという二つのレベルで論旨を展開している。VP3.9.1 における「ある者達」という表現の使用は、そのような意味で語意の根拠としての語ブラフマンの原理化と語意の抽出を通じた文意の分析という両方向で行われるという、VP 第三巻におけるバルトリハリの思索の傾向をよく示していると言えるであろう。

従来、VP3.9.1 はヘーラーラージャの注釈に基づいてヴァイシェシカ学派の 時間 理解が紹介されている詩節として理解されてきた。しかし、この詩節において述べられている 時間 観をヴァイシェシカ学派のものであるとするならば、バルトリハリが言語表現上の 時間 を論じ始めようとするとき、果たしてヴァイシェシカ学派の見解の紹介から議論を進めようとしたのだろうかという疑問が起こるのを禁じ得ない。さらに、そのヴァイシェシカ学派の 時間 観は VP3.6.1 における 時間 観や VP3.9.1 に後続する詩節において述べられている 時間 理解と相通じているとは理解し難いのである。

## ヴリッティカーラの思想的立場 「ミーマーンサー哲学」成立過程についての一視点

藤井 隆道

古典ミーマーンサー学の、哲学的な議論領域への関与を動機づけた思想史的な背景は、いまとってはよく知られている。元来、ヴェーダのテキストに対する解釈原則を対論を通じて導出し、祭式行為についての適正な理解を得ることを目的として成立したこの学問伝統は、次第に、ヴェーダの権威を守護するための護教的な議論を積極的に行うようになっていく。こうした思想史的な脈絡のなかに、いわゆる「ミーマーンサー哲学」の成立と展開は位置づけられる。したがって、特に古い時期の哲学的な議論の全体像を明らかにする作業は、彼らが念頭におく護教論の枠組みを意識したうえでなされる必要がある。

『ジャイミニスートラ』(JS)に現存する最古の注釈を著したシャバラスヴァーミンは、JS 1.1.3-5への注釈部分において、彼が「ヴリッティカーラ」と呼ぶ先師の見解を大規模なかたちで紹介している。この、いわゆる「ヴリッティカーラ資料」でなされた諸議論は、『シャバラ注』のなかでもとりわけ哲学的色彩が濃く、以後の「ミーマーンサー哲学」の基礎的な方向性がそこで確立されたとみてよい。

ヴリッティカーラとシャバラの思想を比較する先行研究においては、哲学的思考に対する資質や関心の度合いの差を評価するという観点に重点が置かれてきた。本発表では、より具体的に、両者の思想的立場の相違を明らかにすることを目指す。周知の通り、二人が注釈対象として想定するスートラの本文は異なっている。またたとえば、JS 1.1.5において、意味論的な関係が本源的なもの (autpattika) であることが主張されているが、この本源性の概念に対するヴリッティカーラとシャバラの解釈は異なっている。前者は、それを非人為性 (apauruṣeyatva) と等置し、後者は恒常性 (nityatva) として理解している。こうした相違は、いかなる思想基盤に由来するのであろうか。これらの事実の説明を与える仮説の提示を試みて、「ミーマーンサー哲学」の成立史を再構成するうえでの一視点を提供したいと考えている。

赤松明彦（京都大学）

6世紀に活躍したジャイナ教の思想家マッラヴァーディンの著作『十二の観点の輻からなる車輪』（以下、『観点車輪』と略）は、当時流行していた諸学派の世界観（ものの見方）を図式的に把握しようとした論書である。それは各学派の主張の内容を要約して単に批判したのではなく、各学派の言説のもとにあって、それを生み出すことになった「ものの見方」を体系的に分類し、それぞれの成り立ちを図式的にかつ網羅的に説明しようとする意図をもつものであった。

「見られるものはひとつであっても、ものの見方は様々である」とは、バルトリハリの言葉であるが、この考えを受け継ぐかたちで、マッラヴァーディンがこの著作を構想したことは明らかである。この世界について、ある者は、変化し多様なものであると主張するが、別のある者は、永遠不変だと主張する。このような「ものの見方」の成り立ちを、観点のとり方から説明しようとするのが、「十二の観点」という図式である。ひとつの同じ事物について語るときの観点の基本的なあり方として、マッラヴァーディンはまず、vidhi（実定）とniyama（述定）という二つを提出している。前者は事物についての indicative な表現、後者は predicative な表現とひとまず言えるかもしれない。ある事物について、まず基本的には、vidhiの観点、niyamaの観点、そしてvidhiとniyamaが共立する観点の三つがあるとされる。この三つの観点は、言ってみればある事物についての認識論的な「ものの見方」の三類型であるが、この「ものの見方」が、存在論的な「ものあり方」へと転化されると、それぞれについてさらに同じ三つの「ものの見方」がありうることになるだろう。かくして、すべての観点を列挙すれば、十二の観点がありうるのである。

さて、マッラヴァーディンは、『観点車輪』の各章において、可能な観点を順次とりあげながら、それらを別の観点から批判して行くのであるが、各章において、すなわち十二あるすべての章において、「空華」（kha-puṣpa）を、対論者の主張に対する否定的な喩例として示している。そこでの批判の仕方は、おおむね、「対論者によって言われるもの・ことは非実である。非存在であるから。空華のごとし」というパターンをとっている。そこで本発表では、この「空華」の用例を逐一検討することによって、その存在資格を問うことにしたい。いったいすべての観点において、否定的な喩例として働く「空華」とは、どのような存在であるのか。それは対論者の肯定的な主張を批判するための否定的な喩例、つまり対論者の主張の虚偽を表すものであるのか。しかし、もし「空華」が、対論者の主張の虚偽を言うものがあるならば、それはパースペクティヴィズムと矛盾するのではないか。マッラヴァーディンは、なぜかくも頻繁に、「空華」の喩例を持ち出したのであろうか。